

五首会 ニュース

発行所
医療法人財団五省会西能病院
〒930 富山市五福1130
TEL (0764) 41-2481(代)
発行人 西能正一郎

車椅子が駆け回る

身障者でつくった介護用品の「ウイル」



事務所で仕事の打ち合わせや部品の修理をする仲間たち

きめ細かいサービスで
もう一年、業績は日々に伸びる

もう一年、業績は日々に伸びる

車椅子（四人）、軽度障害（一人）の仲間たち五人が、パートの女性二を加え、総勢七人で株式会社「ウイル」を発足させたのは昨年十月一日おむつかばーから車椅子まで身障者や老人の介護用品の総合販売。身障老人用の住宅も手がけている。業績は毎々伸びており、「きめ細かいサービスを」と大ハリキリ。今日も車椅子が県下の病院や老人ホームを駆け回

五 省

とり、他人とのコミュニケーション作りとして、幅広い効果を持つわけですが、時には予期せぬ事態や障害を来す可能性も少くありません。この上うな理由から、スポーツの普及とともにスポーツ医学が注目されました。

しかし、スポーツ医学の内容は、広くて深くいろいろな専門分野の協力が必要な総合医学であります。小児から高令者、競技スポーツと市民スポーツ等、対象者や目的がさまざまであり、それに

重要な分野であります。
私は、専門の整形外科の分野で、スポーツ外来を開き、数多くのスポーツ外傷や障害の治療を行なつてきましたが、スポーツの現場は異常な程に過熱しております。レギュラーポジションを目指す高校生が治療中途で無理をして大けがをしたり、親の期待が先行して肘の変形を起こした少年野球選手等考えさせられる症例も少なからず診てまいりました。最近では、うざぎ跳びが膝関節に良くないとの章

もうひとつは、スポーツ医学を担当する医療団体の問題であります。日本体育協会が先きがけたスポーツドクター制度に追随して、最近は日本整形外科学会、日本医師会が、さらに近い将来、日本体力医学会がそれぞれにスポーツ認定医制度を打ち出し主導権の争奪戦を演じているように思われます。国民のスポーツ振興を中心望むならば早期の統一に向けた施策が必要であります。

ない。日ごろの修練がどう表われるか。どん場の精神の強さが、たとえ互角の力でも微妙に勝負を分ける▼選手ばかりではない。人間は一生のうち何度もかそんな精神の強さを問われる場が訪れる。そのため心を鍛えてお

験をしました。寝たきりになつてから初めてお風呂に入つたという方は、入浴後の浴槽のあまりの汚れにびっくり。入浴の度に「ありがとう、ありがとう」と手を合わせ涙を流して喜ばれる九十三才のおばあさん。少々痴呆気味で、訪ねてきた娘さんの顔も忘れてはつきりしないのに、次回の入浴日だけをしづかり覚えておられるおじいさん。皆さんに喜こばれながら毎日スタッフ一同奮闘しております。今後も一人ひとりの嬉しさや顔を励みに頑張つて

スボーツ医学の 現状と課題

二、シングルに科学的理論を
重要な事前のメデカルチャック

制度では、すべて個人負担となるため、受診を希望す

手を合わせ涙を
専用車 入浴

近年、スポーツ愛好者は世界的に増加し、その数は人口の75%ともいわれています。ここ富山では、二千年国体に向けて県の重要な課題として、組み、底辺のスポーツ人口の拡大、競技力の向上、スポーツ施設の拡充の計画が着々と進めら

栄養とカロリーの計算には栄養士が、また競技力向上のためには、運動生理学者やトレーナーの協力が必要であります。

最近では、イメージトレーニングも普及し、精神心理学の分野も注目されています。障害を起こした

科学的理論に基づいたトレーニングを取り入れる必要があります。

スポーツ医学の将来を考えるとき、まだまだ問題があります。老若男女が健康のために行なうスポーツが、事故なく楽しく普及するためには、呼吸循環器を主体とした事前のメデカルチェックが

手を合わせ涙を
入浴専用車

営業関係は、車椅子の取締役社長、松浦良男さん（四）専務、山口裕二さん（三）常務、黒田勉さん（三）の三人と輕度障害の副社長、大井行衛さん（四）の四人だ。車椅子の荒木由美さんは事務をとつてゐる。みんなマイカーで通勤、営業用にも使つてゐる。身障者だけがつくつた会社は全国的にも珍しく、富山県では初めてだった。

営業品目は、車椅子、歩行器、杖、寝具、特別ベッド、自助具から改良ねまき、エプロン、収尿器と、介護用品がとり揃えてある。

注文取りに回っているところは、県下の病院、医院、保健所、特別老人ホームなどの施設、在宅の老人や身障者。

この十月から一本杖の製作、販売も。将来の夢は、事務所を大きくして展示コーナーを設けること、そして車椅子をつく

仲間に意欲を
松浦社長の話 みんな力を合わせてやっているので、この一年で業績が伸びた。お客様から「がんばって下さい」と声をかけられるのが一番の励みになる。身障者の皆さん意欲をもつて下さい

いろんな人と話が 黒田常務の話 いろんな人に接して話ができるのが嬉しい。身障者の方達は家に閉じこもらず外に飛び出して下さい。

最近は病院から在宅療養へと、保健医療のあり方が問われ、訪問看護の果たす役割が重要になつてきました。西能病院でもこれらのこと況をみて昨年四月から在宅療養を開始いたしました。退院された患者さんの中から大腿骨頸部骨折、脊髓損傷、片麻痺、糖尿病、在宅酸素療法などを対象としています。週一回から月一回と、患者さんの状態によつて訪問回数は異なりますが、八月末現在までに患者さん四十人、訪問回数は延べ百五十回になつております。

ドクターを中心的に、リハビリの先生、栄養士、検査室、医療ソーシャルワーカーと、各部署の協力によつてやつております。特に栄養士の方には患者さんの手をとつて、栄養指導、家庭料理に腕をふるつてもらい、とても感謝され喜ばれております。

慢性疾患の患者さんは保健婦だけ訪れるこ

井副社長は、身障者の生活指導をしていました。あと施設や家にいたが、「何かやりたい」の意欲がいっぱいだった。そして「自分たち仲間だけでやろう」と意気投合した。みんなで資金を出し合い、一階建ての小さな事務所を小杉町黒河地内の県道へ移転した。そこには、車椅子は名古屋や岐阜から入ってくる。また、経験を生かして増改築の設計施工もやっている。「細かいところまで行きとどいている」と評判は上々。北陸は勿論、新潟や岐阜からも注文がきている。

活動の地域医療チーム

